

## 19世紀アメリカ小説にみる家族の構図

別 府 恵 子

アメリカが西へと発展を続けていた19世紀前半、その推進力となった男たちの夢をイカボッド・クレイン (Washington Irving, “The Legend of Sleepy Hollow”, 1820) は、次のように空想する。「家財道具一式、そして若く美しいカトリーナと彼らの子どもたちを幌馬車に乗せ、自分は小馬を従えた馬に乗って、ケンタッキー、テネシー、と広大な西部の荒野に安住の場所(家庭)を建設しよう」と。しかし、イカボッドの雄大な「アメリカン・ファミリー」建設の夢は、現実となる以前に崩壊する。独立戦争の古戦場を徘徊するという「首のない騎士」の幽霊に恐れをなして彼は村から逃げ出したことになっている。

アメリカでは建国以来、アーヴィングの主人公が空想に描いた「健全な家族」が不可欠な社会単位として求められ、人々の生活を精神、物質両面で支える場としてイメージ化されてきた。だが、同じアーヴィングの“Rip Van Winkle”にもあるように、文学に描かれた「家族」は、「安らぎと憩い」、「地上の楽園」のイメージとは裏腹に否定的な形をとることが多い。リップ・ヴァン・ウィンクルはいわゆる「駄目亭主」の典型で、口やかましい女房を逃れて山に蒸発するが、アメリカ文学にはこうしたリップ・ヴァン・ウィンクル症候群なる男たちが頻出する。これをレズリー・フィードラーは「逃避の戦術」と称したのである。これまでのアメリカ小説においては父権および夫権の喪失や放棄が、「家族」の不在あるいはその崩壊へとつながる場合が多い。小論ではアメリカにおける家族の構図を19世紀後半に書かれた作品、Hawthorneの*The Blithedale Romance* (1852), Melvilleの*Pierre* (1852), Mrs. Stoweの*The Minister's Wooing* (1859), Louisa May Alcottの*Little Women* (1869)の考察をとおし

て明らかにしたい。

## I

第41代アメリカ大統領就任式後の『朝日新聞』(1989年1月22日)に、「こんな家族が米国民の理想?」と題して、ブッシュ新大統領一家の紹介記事が掲載され、その新聞記事は「大統領一家のライフスタイルは、アメリカのその時代のムードをそのまま表わしているとよくいわれる。ブッシュファミリーは、家族の絆のきわめて強い、いま、アメリカが理想とする家族といえるかも知れない」と締めくくられていた。この記事からみる限り、イカボッド・クレインが夢みた壮大な「アメリカン・ファミリー」は現実の「家族像」として健在であるといえよう。

確かに、現在「家庭内離婚」、「親子の断絶」とか「家庭の崩壊」が云々される一方、以前にもまして、「家族」のあり方、その意味が真剣に問われ、人類の歴史でもっとも古い社会単位である「家族」の理想像が模索されている。というのも、社会学者ウィリアム・J・グッドによれば、「殆どすべての人間は、家族の一員としての権利と義務のしがらみをもちながら生きている。……社会道徳や倫理を説く古代の記録をみれば、もし人が家族の構成員としての義務を怠ればその社会は集団としての堅固さを失う」<sup>1)</sup>という。マーガレット・ミードも「家族は、様々な社会制度のなかでもっとも堅牢、頑強な制度であって、事実、我々の人間性は、家族制度に負うところが大きい。家族との生活をとおして、人は責任ある社会人として行動するよう教育される」<sup>2)</sup>と、家族のレーズン・デートルを力説する。家族という生活環境が、人の「社会化」に寄与することはいまさらいうまでもない。そして、特にアメリカでは建国以来、家族が、そして生活の場としての家庭が人間のパーソナリティ形成の場として重視され、その役割が女性、母親に荷担されてきた。それだからこそ、「ママと星条旗とアップルパイ」といわれる、いささか感傷的な母親崇拜、母性信仰が人々の深層心理にインプットされてきたのである。

アメリカにおける家族の原型はヨーロッパ文化の伝統を受け継いで、それを新大陸での生活体験および状況にあわせて形成された。初期の移民たちは、「核家族」かあるいは独身者の場合が多く、アメリカ植民地では、大家族制より、夫婦家族が主な家族体制だったといつてよい。独身の移住者は居住地の定まらない男性だったから、家族間の絆はきわめて希薄なものだった。従って、先述のように憩いの場としての家庭、家族への憧憬も強かったといえる。

また、ヨーロッパの家父長制をモデルにしたアメリカの家族の構図は夫＝父が家長として、“provider”として支配する父権制に基づくものだった。アメリカが独立共和国となり、19世紀に入って西部開拓が推進すると、辺境では早婚が推奨され、大家族が望まれた。厳しい辺境の生活には、精神のよりどころとしての「家庭性」が不可欠であった。冒頭に引用したアーヴィングのイカボッドの描いた夢は単なる夢でなく、実利的生活の知恵だったのである。また結婚相手の選択も平等主義が徹底され、個人主義に基づく新しい夫婦の誕生は歓迎されたが、同時に独立した家族間の絆は、それぞれの安全、平和維持のために緊密にならざるをえなかった。

こうしたアメリカにおける家族体制のモデルあるいは変形がオルコットの *Little Women* 『若草物語』、そしてストウの *The Minister's Wooing* 『牧師の求婚』に見事に呈示されている。これらの作品はそれぞれ「家族崇拜」を推奨し、家族国家における最高の牧師としての女性＝母親の役割にスポットライトをあてる。「家族」の輪＝和が、家族一人一人の幸福に密接にかかわっていることを提言するのである。これら女性作家の作品には、キリスト教（ピューリタン）倫理の要である自己犠牲という美德がもっとも美しく発揮される場としての家族空間が描かれ、また女性は母親として妻として、家族全員の慰安者であり、尽きない愛の行使者であることが強調される。すなわち、「地上における天国＝楽園」としての家庭での「救済主」（domestic savior）の役割が、女性＝母＝妻に課せられる。これら二作品と対照的立場をとる作品——否定的、懐疑的家族像、あるいは、家族不在の小説——として、ホーソンの *The Blithedale Ro-*

*mance*『ブライズデイル物語』とメルヴィルの *Pierre*『ピエール』を取り上げ、同時代に書かれた作品でありながら相対立する家族像を描き出していることに注目したいと思う。それぞれの家族像が女性、男性作家という書き手の性別によって左右されているのか、それとも偶然のことであるのか興味ある問題ではある。

## II

結論を先取りしたようだが、以下作品にそって、少し詳しくそれぞれの家族像を考察したい。18-19世紀に行なわれた女性教育はある女性の「日記」にあるように、実に「共和国の母」予備軍を育成することを目的としたものだった。すなわち、「全能の神がその全き英知で、それぞれの性に、種々の状況のもと、様々な役割を配剤された。……男性のより頑強な体軀と知性には、筋肉労働と科学的探求が配され、優しい女性の仕事は、家庭内の諸々の義務を嚴重に施行することによって、その家庭を樂園とすること」<sup>3)</sup> だった。

ここに挙げられた家庭内における、家族構成員の役割分担が、忠実に絵に描いたように実行されているのがオルコットのマーチ一家であり、調和のとれた「地上の樂園」がストウのケイティ・スカダーの支配する18世紀後半から19世紀初期のニュー・イングランドにみられた典型的「家庭」のイメージである。「それは修道院より神聖なところ、また教会や祭壇よりも聖者にふさわしいところ、神によって備えられた女性のやしろ、クリスチャンホーム」<sup>4)</sup> だったという。そうした“Christian home”の理想像が、母親から娘たちに受け継がれていったのである。女性にとって自己犠牲とは修道女として隠遁者、世捨て人となることではなく、聖職者になって神に献身することでもなく、地上の天国、家庭において、家族のために献身することであったという。

こうして巧妙にすり替えられた自己犠牲、自己献身の美德を家族のために実践しているのが『若草物語』の主人公ジョー・マーチである。<sup>5)</sup> 自分の書きたいものを犠牲にして、家族の生活を支えるためにスリラーものを書き、日銭を稼

ぐのである。彼女の稿料で母親と病弱なベスは海に保養に行くことができる。ここで読者は、奇妙なことに気づくのである。家族の長、扶養者が夫＝父であるなら、マーチ氏の存在はどうなっているのかということである。『若草物語』のドラマの時代背景は折りしも南北戦争。都合よくも、マーチ氏は従軍牧師として公の場で仕事をしていることになっている。おまけに名誉の負傷までして、一年後のクリスマスに「英雄」として家族全員に歓迎される。その間、父から「家の男子」として留守を守るようジョーは委託されているのである。しかし、ジョーの稼ぎ手としての責任は父の帰宅後もなんら変化がない。さらに、ストウの『牧師の求婚』においても、船長であったメアリーの父親は、航海中熱病にかかって死亡している。メアリーは母子家庭で育つのである。完全な家族像、理想の家族像を呈示している筈のこれらの作品において、父親の影が薄い。しかし、次の引用が示すように家長としてのマーチ氏の存在は「天の父」のように絶対的なものである。なぜなら、父権制社会では母より父の存在を重くみるからである。

「よそのものには、活動的な働き者の五人の女性たちがマーチ家を支配しているかにみえた。実際多くのことにおいてそれは本当だったが、それでも、書齋で静かに座っている学者のマーチ氏が、一家の長であり、その良心、錨であり、慰め主であることに変わりはなかった。多忙で、雑事に煩わされている女たちは、困難なできごとに出会うと夫であり父であるマーチ氏に相談するのであった。」<sup>6)</sup>

それでは、マーチ家や、ストウのいう「クリスチャンホーム」において母親の存在が父親の存在よりも重んじられ、一見母系家族であるかにみえるのは何を意味するのだろうか。これは、キリスト教におけるマリア信仰と深いかわりがある。メアリー・スカダーも、その母親のスカダー夫人もキリストの母マリアと重ねて描かれている。(メアリーは「聖母マリアの娘時代の姿を描いた古い絵」のようだとされている。)つまり、『牧師の求婚』のスカダー家は、聖家族として描かれている。聖家族においては、父親の素性が問題であってヨセ

フは養父として機能すればよく、従って地上の父親の存在は二義的なのである。スカダー夫人が夫は現在の自分を作ってくれた神のような存在だと信じていることからして、メアリーは父親不在の神の子として捉えられている。

キリスト教布教の歴史的推移のなかで古代から存在した地母神信仰を母胎とした社会に父権制の社会制度が発達し、母系社会から父系社会へ移行する過程において、イエスを社会的に重要な存在として定着させるためには、養い親とはいえヨセフの家系を明確にする必要があったと『聖母マリアの謎』の著者は説明する。<sup>7)</sup> といっても聖家族において父親は神であるから、この世での父親は問題ではない。聖家族における父親の存在は、はじめから影が薄いのである。ちょうどマーチ家における「provider」としてのマーチ氏の存在や、スカダー家における不在の父親の例が示すように。実にこれは父権制における家族の構図の矛盾を露呈するものである。この父親不在は工業化社会が進むにつれ、現実の社会問題となる。職場で一日の大半を過ごす父親は特に年少の子どもにとって遠い存在となる。そして、家庭における年少者のパーソナリティ形成の責任は、家庭国家の最高の責任者、牧師としての女性＝母親に委ねられる。

だが、すでに『若草物語』にみたように家庭における父親の影の薄さは、その経済力の欠如、家族の扶養者として失格していることを表わしている。実際、ジョーをはじめ四人の姉妹たちそれぞれが家計を助けるため働いているのである。ただ、オルコットの小説ではマーチ氏が聖職者であるため、マーチ家における母親の力と父親の力の均衡は保たれている。さらに作者もこの世の成功、知識、名誉よりも「妻」、「子ども」、「家庭」を価値あるものとして謳歌している。あれほど「独立すること」、「自由が欲しいから、ある特定の人間にはコミットしない」とっていたジョーに「この世で家族ほど素晴らしいものはない<sup>8)</sup>」と告白させる。19世紀のニュー・イングランドにおいてキリスト教の権力が衰退し、教会にとってかわって家庭が年少者の教育の場となり、かつて宗教や社会慣習のもっていた権威にかわって社会を支配する力になったのが経済力である。オルコットはこの富の力より価値あるものとして家族の協調を説き、人間

としての成長が富の獲得や蓄積よりはるかに大切であることを『若草物語』で説いたのである。

『牧師の求婚』でも、天使のように美しく清らかで信仰心の厚いメアリーの祈りと導きで、真実の信仰に導かれたジェイムズは、航海から富をもって生還し、家族のために「立派な家を、港を望む小高い丘の上に建て」<sup>9)</sup>、名実ともに家長として治まる。また、マーチ家の姉妹たちもそれぞれ自分が「一番幸せな女性」だといえる結婚をし、家族に恵まれて、物語は完結する。これらの小説が書かれた19世紀のアメリカ社会では結婚して家族をもつことが、女性が自己実現するための不可欠の選択であったからであろう。

### III

さて、ホーソンとメルヴィルの小説にみられる家族の構図は、上にみたような陽画の好ましい「家族像」ではない。オルコットやストウの描く家族国家においては暗に容認されていた「父親不在」が、ホーソンの『ブライズデイル物語』やメルヴィルの『ピエール』では文字どおり致命的なものになっている。『ブライズデイル物語』は、1841-47にかけてボストンの郊外にあるウェスト・ロックスバリーでの実験農場、ブルック・ファームを舞台にした一種のユートピア小説である。ブルック・ファームの構想のもとになったフランスの社会思想家、シャルル・フーリエの説いたファランクス理論は、ある点では家族制（結婚制度）の改良を目指したものと見える。ということは19世紀中葉にアメリカ各地で試みられたユートピア社会建設とも関係して、一時期ホーソンも参加したブルック・ファームはアメリカ人たちの「地上の楽園」建設の夢、よりよい生活環境への探求心の表われであり、また現存の社会制度、家族のあり方に対するアンティテーゼを提供しているのである。

『ブライズデイル物語』に描かれる家族は、すでに家長である夫＝父の浪費癖によって崩壊している。妻は死亡、世間体を気にする一族の取りなしで法的制裁は免れたものの、親戚一同から見放され、一人娘のゼノビアを見捨てて社会

的には抹殺された生活を送っているのがオールド・ムーディと呼ばれる男である。彼は心優しいお針子と再婚し、彼女との間にできた娘プリシラの作る絹の財布を酒場で売って暮らしている。ゼノビア、プリシラの「父親」であるオールド・ムーディなる男はいわゆる夫権、父権を放棄した経済能力ゼロの社会的落伍者である。

また、恐らくは財産目当ての不幸な結婚に破れたゼノビアの謎に包まれた過去、社会改革者ホリングスワースの「裏切り」に絶望した彼女の入水自殺など、ホーソンの小説には家族や結婚に対する否定的な姿勢しかみられない。このゼノビアが、『19世紀における女性』の著者であるマーガレット・フラーをモデルにした人物だとすると、当時の女権運動に対するホーソンの批判ともあいまって、彼の作品における家族の意味、女性の役割もきわめて複雑になってくる。「女の場合は家庭にある」とのホリングスワースの言説も、彼とプリシラとの結びつきを考えると、皮肉に聞こえてくる。ブライズデイルでの共同生活を離れて久しくホリングスワースとプリシラ二人の行く末を見届けるため、共同農場を訪れたマイルズ・カヴァデイルのみたホリングスワースとプリシラの結婚も、幸せな家族像からはほど遠い。熱狂的な社会改良家のホリングスワースが、子どものような「去勢された夫」になっているのを見て、竜飲を下したかつてのライヴァルの皮肉な目をとおしたものであるにしてもである。<sup>10)</sup>

そして、カヴァデイル自身は、家族をもてない男、永遠の独身者をかこっている。<sup>11)</sup>「幸せな家族」をホテルの窓ごしにしかみることのできない、人生の傍観者である。(人生の傍観者の人物は、ジェイムズの主人公をはじめ、アメリカ文学には多い。これらの人生の傍観者を社会的不適応者としてみるより、ジェイムズの言にあるように、結婚、家庭というものに対する不信感あるいは、過度の期待の結果、彼らを選択した生きざまととれなくもない。) こうした「永遠の独身者」は、メルヴィルの短編にも散見されるが、最後に『ピエール』にみられる家族像に触れて、19世紀アメリカ小説にみられる家族の構図の考察を終わりたい。



サドル・メドウズにあるグレンディニング家も解体、崩壊の運命にある。グレンディニング家最後の後継者ピエールはすべてを犠牲にしても、家名、父親の権威、名誉を守ろうとするが、それは彼のひとり相撲で失敗に終わる。名門グレンディニング家の解体は、父権制への痛烈な批判ともとれなくはない。サドル・メドウズを支配するグレンディニング家の家長はすでに死亡。ピエールと母親の関係は、不吉な臭いのする近親相姦的な親子関係である。誇張した修辭的表現によって退廢の雰囲氣がいやが上にも増幅されている。<sup>12)</sup> そもそも、ピエールがすべてを賭けて守るべきもの——父の名誉、家族——は最初からなかったのである。

ピエールの祖父がアメリカ独立戦争の英雄であったという名門の家系を誇りにする、気位高きメアリ・グレンディニング夫人は家系の断絶を「私は滅亡する家の最後の男子を産んだかようだ」<sup>13)</sup> と直感的に感じ取っている。「しかし、どのようなことが起ころうと青二才の息子などに懇願することはできない」とこの誇り高い母は思う。実際、ピエールがルーシーとの婚約を破棄して、素性の知れない「平民」の娘と結婚したのを知って彼女は激怒し、あれほど溺愛していたかにもえた唯一無二のグレンディニング家の跡継ぎをいともたやすく勘当してしまう。そしてグレンディニング家の家督をピエールの従兄弟、グレン・スタンレイに譲って、彼女自らも破滅する。ここには、ストウや、オルコットの創造した、家族国家の牧師としての母親像はみられず、利己的で、冷酷無慈悲な母親、あるいは名門一家の家長的存在、権威の権化としてピエールの母は描かれている。

一方、自分を棄て、異母姉イザベルと偽装結婚した婚約者のピエールの真実、純粹さを信じるルーシーは、グレン・スタンレイの求婚を拒み家出。イザベルと偽装結婚をしたピエールの後を追って、彼らの「家族」の一員として同居する決心をする。ルーシーの母親も自分の意志に反抗する娘を勘当してしまう。<sup>14)</sup> つまり、タータン夫人もグレンディニング夫人同様、世俗の名誉と財産を重視する父権制の権威主義を振りかざす恐ろしい母親、すべてを飲み込むという母

性の負の面を顕現している。

『牧師の求婚』でストウが呈示した「母と子」という人間的な感情に基づいた愛の神とは対照的な「旧約の怒と権威」の神の観念がこの二人の母親にみられるのである。佐藤宏子氏の指摘にもあるように、ニューポートの田舎町を舞台にした男女の三角関係を描いた恋愛小説をとおして19世紀におけるキリスト教の変容を旧約の怒りと力の神から新約的な愛の神の観念への変化として捉えたストウの視点に女性作家としての視点を重ねるのは、深読みであろうか。「19世紀アメリカのキリスト教を支えたといえるビーチャー一族の一人であったからこそ、これだけの広い視野が得られたのであろうが、妻として母として生きた『女性』であったということが、愛と救済の信仰を深く理解し、一つの物語のなかに織り込めたということである」<sup>15)</sup>と佐藤氏は説く。とするとメルヴィルのグレンディニング夫人の傲慢さには、人間的な感情や愛より家名を重んずる男性中心社会の権威主義が反映しているとみることもできるのではなかろうか。そして、悲劇に終わったとはいえ、ルーシーのピエールに対する不動の信頼と愛のなかに、メアリー・スカダーや、マーチ夫人の片鱗がみられるのである。

さて、『ピエール』を、牧歌的サドル・メドウズを背景にした文字どおり楽園のような家庭の解体、家族の崩壊を描いた小説として読んできたが、いまいちど家族という論点にもどると、奇妙なことに気がつくのである。すなわちピエールがイザベルを保護し、彼女がグレンディニング家の一員として正当な権利を享受するための手だてとして、彼女との偽装結婚を思いつくことである。<sup>16)</sup>つまり、ピエールは父のイザベル認知不履行を肩代わりしようとするのである。さらに自分を捨てた婚約者とその妻の家庭に同居するためにルーシーもまた、家族という隠れ蓑(ピエールの従姉妹という)<sup>17)</sup>を方便として利用している点である。ここに、奇妙な疑似家族ができあがる。恐らくニューヨークであろう都会で、ピエール、イザベル、ルーシー(そしてデリー)たちの演じる家族ゴッコが『ピエール』後半のドラマを形成している。

一方で、家庭の崩壊、家族の絆の脆さを描きながら、家族からの離脱者たちが社会のなかで生き残るためには、家族という形態を借りなければならないという皮肉に作者メルヴィルの家族という制度に対する、「両義性」(ambiguities) がこめられているのではなからうか。そして、先述のマーガレット・ミードの弁「家族は、様々な社会制度のなかでもっとも堅牢、頑強な制度」でありうる証拠でもあろう。ホーソンの『プライズデイル物語』の終章、語り手のカヴァデイルの告白にあるように、ホリングスワースの社会改革への協力を拒否し、またゼノビア、プリシラのどちらにもコミットせず、「幸せとはいえないまでも、そこそこ筒がなく」<sup>18)</sup> 暮らすという人生の傍観者の立場をとれなかったピエールは、自ら絶叫するように、「真実の道化、美德の道化、運命の道化」、そしてつけ加えるなら、責任不履行の「家長」の道化でしかないといえよう。

こうした、夫や、父としての権利放棄、父権制の抱える矛盾や不合理性を逆手にとって、母と子の絆を強調した家族像を呈示したのが女性作家のストウ夫人やオルコットでなかったのではなからうか。

## 注

この小論は第23回アメリカ学会年次大会(1989年3月31日)でのシンポジウム「アメリカ文学における家族」の一環として口頭発表したものに基づく。

- 1) William J. Goode, *The Family* (Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1964), pp. 1-2.
- 2) Margaret Mead, "The Impact of Cultural Changes on the Family," *The Family in the Urban Community* (Detroit: The Merrill-Palmer School, 1953), p. 4.
- 3) Elizabeth House Trist, "Diary" quoted in Annette Kolodony's "Honing the Habitable Languagescape," in *Women and Language in Literature and Society* ed. Sally McConnell-Ginet et al (New York: Praeger, 1980), p. 256.
- 4) Harriet Beecher Stowe, *The Minister's Wooing* (The Stowe-Day Foundation, 1978), pp. 567-68.

19世紀アメリカ小説にみる家族の構図

- 5) Louisa May Alcott, *Little Women* (Everyman's Library, 1956), pp. 314–15.
- 6) *Ibid.*, p. 216.
- 7) 石井美樹子『聖母マリアの謎』(白水社, 1988), pp. 79–82.
- 8) *Little Women*, p. 328, p. 442.
- 9) *The Minister's Wooing*, p. 567.
- 10) Nathaniel Hawthorne, *The Blithedale Romance* (Norton Critical Edition, 1978), p. 223.
- 11) *Ibid.*, p. 140.
- 12) Herman Melville, *Pierre, or the Ambiguities* (Newberry Edition, 1971), p. 5.
- 13) *Ibid.*, p. 131.
- 14) *Ibid.*, p. 329.
- 15) 佐藤宏子『アメリカにおける家庭小説』(研究社, 1987), pp. 135–136 および pp. 121–139 参照。
- 16) *Pierre*, p. 173.
- 17) *Ibid.*, p. 311.
- 18) *The Blithedale Romance*, p. 226.

付記 文中の引用は原文の抄訳であることをことわっておく。

## Summary

# Pictures of the Family in 19th Century American Fiction

Keiko Beppu

Since the beginning of history the family has been recognized as a central element in the social structure in any culture. In his book, *The Family* (1964), William J. Goode contends that the family performs important services for society “such as reproduction, care, maintenance, and socialization of the young.” Likewise, Margaret Mead expounds its *raison d’être* that one’s humanity is nurtured in a family, which is “the toughest institution we have.”

The American family is a transplantation to the American soil of the European model with the father (=husband) as the head and provider of this social unit. Ichabod Crane, Irving’s protagonist in “The Legend of Sleepy Hollow” (1820), pictures his vision of a family as follows:

“... his busy fancy... presented to him the blooming Katrina, with a whole family of children, mounted on the top of a waggon loaded with household trumpery, with pots and kettles dangling beneath; and he beheld himself bestriding a pacing mare, with a colt at her heels, setting out for Kentucky, Tennessee, or the Lord knows where!”

This was an ideal “American family” congenial to the American imagination since the beginning of the Republic. During the 19th century in particular such a vision of a family provided people an incentive to move westward and people the wild west with a whole family of thriving

children. In Irving's story Ichabod's dream of his family, however, was not to be realized.

This paper is an attempt to clarify the nature of "American family" through an examination of its pictures portrayed in the four novels written in the latter half of the 19th century: Hawthorne's *The Blithedale Romance* (1852), Melville's *Pierre* (1852), Mrs. Stowe's *The Minister's Wooing* (1859), and Louise May Alcott's *Little Women* (1869).

(The paper was originally presented at the symposium on "The Family in American Literature" for the 23rd Annual Meeting of the American Studies Society held on March 31, 1989.)